

---

# 君の思い、わからないよ...

罪苑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君の思い、わからないよ…

### 【Nコード】

N6887Z

### 【作者名】

罪苑

### 【あらすじ】

灰狼衆の首領、服部と敵対してしまった壬晴と宵風。二人で過ごした穏やかで、時に苦しくて、楽しいほんの少しの時間。そんな中、刻一刻と迫る宵風の死。それを免れるために秘術のことを知ろうと萬天に帰ることを決意する二人。

今回の話は壬晴視点でいこうと思ってます。

君の思い、わからないよ…(上)(前書き)

隠の王を読んですごく感動したので、その時のテンションで書いた話です。

ちよいと長くなってしまったので上・下に分けていこうと思います。

壬晴視点でいきますよ。

君の思い、わからないよ…(上)

服部さんの宿から今は使われていないこの倉庫までずっと走り続けてきたので俺も宵風も息が上がり<sup>よいて</sup>ついていた。俺は後ろを見て、何も追って来ていない事を確認する。

「ハア…ハア…ハア…。はあ　　っ…」  
「けほっ、ごほごほっ」

宵風が咳き込んだ。俺はそれを心配して、疲れた体を起こした。

「けほっ…」

宵風が咳き込むと、口に当てていた手の隙間から血が流れ落ちる。っ…。大丈夫の一言も言えない。ただ宵風の背中に手を添える事しかできない。

その間も宵風は咳き込み続けている。立っているのも辛くなったのか、ズルズルと床に座り込む。

「随分奥まった所まで来ちゃったね」

「どこだろうっ…」

「足…」

「うん？」

宵風が俺の足を見て言った。

「……うん」

俺はここまで靴を履かずに走って来たので靴下は所々破れ、左の踵

は擦り切れ血が滲んでいた。

「少しだけお金あるからどこかで靴を買っよ。それより…マフラーが」

「マフラー？」

「英はなづかさんが作ってくれた。アルヤで血だらけにしちゃったでしょう。雪見さんにクリーニングに出してもらってたんだけど…これじゃ受け取れないね」

「……」

外は冷たい風が吹いていて倉庫の扉がガタガタ鳴っている。寒くて両腕を抱え込んで小さくなっていたら、宵風が立ち上がった。

「宵風？」

立ち上がったのはいいけれど、フラフラしていて足元がおぼつかない。その内、ドサつと後ろに積んであったセメントの袋に倒れそうになった。

「！」

「う……」

「どこ行くの」

俺が宵風の腕を掴みながら聞くと、俺の手を解いて倉庫の扉に向かった。

「ねえ、危ないよ宵風。待って！」

俺がそう言つと、宵風は俺の方を振り返って一言言つて倉庫から出て行つた。

「大丈夫」

何が、何が大丈夫なんだよ……。

俺は遠ざかっていく宵風の背中を見続けていた。暫くそうしていると、突然音楽が鳴りだした。

「ひゃっ！」

英語の歌詞が流れていたのはケータイ電話だった。ケータイデンワ……。何これ、すっごくドキドキしてるんだけど……。

「……………」

電話の相手は雪見さんだった。鳴り続けている音楽を遮る様に、電話にでた。

『よう壬晴<sup>みはる</sup>、オレだ。おとなしくしてるか？』

姿も何も見えないのに雪見さんの声を聞いたら、なんだか安心してそれがわかるとなんだか悔しくて唇を噛んでいた。俺が返事をしないと雪見さんは心配そうに俺の名前を呼んできた。

『……壬晴？』

「雪見さん……今どこにいるの」

『オレか？……………表の仕事だよ。お前、首領や一季サンに迷惑かけてねえか？』

「服部さん、自分が負けると机ひっくり返して地団太踏むんだよ。」

いい大人なのにね。迷惑したのは俺の方だよ」

『え?』

「トランプゲームのはなし」

『あ~~~~なるほど…って想像すると怖すぎるからそう言う嘘はやめなさい。まあ…とにかくいい子にしてな。また電話するから。じゃあな』

「雪見さん、「そら」って…誰だか知ってる?」

『そら?』

「そらは最初から居なかったって宵風が

」

俺がそこまで言った時、倉庫の外から砂利を踏む音が聞こえた。俺は慌てて電話を切る事にした。

「ううん、なんでもない」

『あつ、おい!なんだよみは「圏外です」

俺はそう言っていると、ブツツと電話を切った。電話を切った丁度その時、宵風が倉庫に入って来た。俺がケータイ電話をポケットにしまっていると、宵風が俺のそばに来て抱えている袋から水、絆創膏、ガ―ゼを取り出して床に置いた。俺はそれを少し屈みながら見ていた。

「これ…どうしたの?」

「近くに薬屋があつたから。おかねはケータイで払える。ゆきみが  
予め入金<sup>チャージ</sup>しておいたみたい」

俺が手袋を取り、ガ―ゼを水で濡らす宵風をぼんやり見ていたら、  
…なに?と言われた。

「詳しいのが意外だと思って…」

「少し使えば解る」

宵風は俺の顔を上に向かせると濡らしたガーゼで俺の顔を拭いてくれた。その後、俺の足を指さしてきた。

「次は足…」

そういうと俺の足に水をかけられた。

つめたい…。さっき俺が言った「意外」…という言葉。違う、宵風は意外なんかじゃないんだ。俺が宵風を知らないだけ。ねえ宵風…これからどうしよう。蛇薬たぢやくの書：雪見さんの車たばに置いてきちゃったし、妖精さんは黙ったままだし。帰るところも…。

俺がそんな事を考えている内に宵風は水をかけ終わったらしく、俺に絆創膏を渡してきた。俺はそれを受け取り足に貼っていく。俺は見えていなかったけど、宵風は目が霞むのか擦っていた。

不安？怖い？悲しい？それを言葉にしたら心が風船みたいに割れてしまうから、だから言わない。本当に今にも破裂してしまいそうで…。ねえ宵風、ほんとに教えてほしい。死にたくはないのなら、生きたくはないの。こんなに君に話したいのに、一言も声が出ないよ。俺が考え事を止めて前を見ると、宵風が床に倒れていた。

「宵風…?」

俺は慌てて宵風の傍に駆け寄り声をかけるがまったく反応しない。

「宵風、宵風っ、宵風！宵風っ！」

「宵風！」

最後に一度、強く叫ぶと宵風は体をビクッと震わせて目を覚ました。



「壬晴……？僕…今何を」

俺はその言葉を聞いて両腕を後ろまで大きく振りかぶり、バチン！と大きな音はするほどの勢いで宵風の頬を叩いた。そしてそのまま頬を抓った。

「う。な…なに…」

宵風ははてなマークを頭の上にいっぱい浮かべている。

「…約束、忘れないで。俺が消すまで、死ぬな…。死んだら、呪ってやる」

俺はその時涙は流していなかったと思う。ただ泣きそうになっただけだ。

「そう…だけど…。呪いって…」

俺の言葉に沈む宵風。

薄っぺらい言葉は簡単に声に出るのにな…。

「もう…首領の所へは戻れないし、ゆきみの家にも帰…戻れないし。どうすれば…どう……」

俺は帽子を拾って宵風の前行き、宵風の顔を見る。俺の瞳に映っているのはただ俺を見る宵風の姿。

く？十？く

「これ…すごくいいけどたかいなあ…」

俺は今靴屋にいる。そこでいい靴を見つけたので値切って買おうとしている。ウルツとした目をして物欲しげな顔をすればだいたいける。

「でも、ほしいなあ…」

「半額でいかがでしょう！いえ、更にその半額でっ！」

「わーい、やすいい」

後で宵風が言ってたけど、その時の俺の背中に悪魔の羽が見えたんだって。変なの。

店を出ると、宵風のケータイ電話が鳴った。

「また、雪見さんから？」

今だに鳴り続けるケータイ電話を見る宵風。

「あの人達…もう諦めて帰ったかな？雪見さん…怒って追っかけてくるかな」

「…」

俺がぼんやりと聞くと宵風は何も返事してこなかった。

「ここからバスに乗って、駅で切符を買おう。時刻表貰って、おべんと買ってそれから…」

「…どこへ、行くの」

宵風は疲れたのか言っている途中でベンチに座った。そんな宵風を振り返りながら俺は考えを言う。

「萬天」

「！」

「雲平先生の行方もわからないし、萬天の里の忍術書も前に全部燃やしちゃったけど…それでも萬天なら10年前の秘術発動の手掛かりが見つかるともしれない」

俺がそう言っていると、宵風はハツとし顔をした。

「雷鳴と虹ーに見つからない様に、英さんに気付かれない様に。あとは上手くして和穂さんと話せたらいいんだけど…」

「……………」

俺は考え込む宵風の横に座った。

「…行かないほうがいい…?」

そう言う俺に宵風は何かを決めた様な顔をして言ってきた。

「大丈夫。君はちゃんと萬天に帰る」

「行くっ」

君の思い、わからないよ…（上）（後書き）

書いている間にずっと思っていたこと。

マンガを全部文字に直すのめんどくせえ！

と思いましたよ、ほんとに…。

でも、壬晴と宵風が仲良しな所を書くのは好きですよ？

ああ、年内に終わるといいなあ…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6887z/>

---

君の思い、わからないよ...

2011年12月23日01時49分発行